

廊下を散歩したり階段に腰かけてお喋りをしている。仕事で忙しい主人と、週に一・二度しか会えなかった娘は、楽しそうだ。私の仕事が一通り済むと主人は玄関まで送ってくれる。娘は「パパ、バイバイ」と手をふる。その瞬間一番つらい。

主人は手術後、傷口が化膿して退院まで一ヵ月かかった。退院の目処がたらず、私たちが行っても一度もベツトから降りてくれない日さえあった。娘は長い電車の中で飽きてきた。混んだ電車の中で「ママ歌って」とせがまれて躊躇していた私は、横で大きな声で泣き出された事もあった。帰宅すると疲れていた。けれど娘はいつもと変わらず明るかった。父親のいない生活に慣れている娘は家においては全く動揺がなかった。私は頭の中も身体も疲れてきた事を感じ始めていた。そんな時の退院であった。十一月二十六日、もう七五三の日も終わっていた。その後通院を続け、事故より四ヵ月後、主人は仕事に復帰した。

育児期の母親の

主婦的状况について

菅野慧理子

突然、小二の長男が入院することになった。ただ今絶食して一週間めである。甘えん坊の彼が泣きごととも言わず頑張っている姿をみて、こんなに強い子だったのか、こんなにすなおな心をしていたのかと、その人となりに気づかされた。そして私はこの頃我が子をよくみていなかったなと反省する。看病の合間に小児病棟の中を歩いてみると、各病室で子供がいろんな病氣と闘っている。お母さん達はとてもいとおしそうにそばにつきそっている。大切な大切な「いのち」である。

緊急入院する前の我が家はごく普通の生活をしてい

た。私は長男を送り出すと、三歳の二男と外遊びしたり、親の都合でつれ歩いたりしていた。自分のことが何もしできないと嘆いてみたり、近所の人からよく子供の相手をしているわねと半ばあきれ顔に言われたり、子供は放っておいた方がたくましくなるのかなと悩んだりしていた。主に育児中の専業主婦の解放されないもやもやは、何か抜け道はないのかと試行錯誤の日々でした。

ふり返ってみると、長男を育てるとき、夫の仕事が猛烈に忙しく、育児を私一人でしょいこんで大いに気負っていた。近隣とのくだけて開かれた関係もそれ程なかったし、育児とはこういうものだとしてさら求めもしなかった。核家族で兄弟もまだいなかったもので、それこそ朝から晩まで一年365日べったりの生活であった。擬似母子家庭である。夫が他のことにわずらわされずに仕事ができるようにという、あたりまえの配慮だと思ひこんでいた。ところが、この頃、夫も私も産業社会の被害者なのではないかと思ひ始めた。高度成長でより多くの収益をあげるため、妻が家事育児をしょいこむことは社会にと

っては好都合なのかもしれない。しかし、そういう状況におかれた母親が一人きりで上手に子育てができるだろうか。都市に住む核家族の場合、身内や近隣の手助けを得にくく、育児を負担に思い、喜びとしない母親が増えているのではないだろうか。私の周りでも、ゆったりとふくよかな愛情で子どものかかわりを楽しむ人を余りみかけないように思う。どちらかといえばイライラと一方的に叱っている大声をよくきく。ひどいなとその叱られている子に同情してしまう。けれど何だかせっぱつまった母親の気持がわからないので複雑な想いである。

育児期の母親は生活範囲も限られて、さまざまな人の価値感にふれたり、刺激を受けるチャンスが少ない。人間として成長するのに必要な豊かな人間関係が極端に狭いと思う。したがって自分の考えを他とてらしあわせることもないし、批判されることもないので殆んどひとりよがりの思いのままに日常がつみ重なっていく。おまけに今の世の中、イノチよりモノが優先されてはいないか。

モノを生産しない女の仕事は男より下におかれ、イノチを産み、育てることが価値の低いものとされてはいないだろうか。ましてその社会通念に男だけでなく女自身もしらないうちにしばられているように思う。子育てを何の感動もなしに頭の中で事務的に処理しているようにみえる時さえある。私自身、何か焦っていて、母親になりきれないと感じることが確かにある。

このように考えてきたとき、母親自身が育児の価値をとらえ直すと同時に、孤立した母と子を支える保育集団を地域につくる必要がでてくる。母親の側もその活動の中で、主婦役や母親役以外の個人として期待されたり、共感し合ったりする場をもちたい。解放された母親が地域の人々と豊かに交わりながら、母子ともに育つことが今求められているのではないだろうか。

私は二男を育てるときは、こういう考えもあって、週一回20組位の仲間と「歩く」活動をしている。お弁当をもって顔なじみのお母さんや友達と自然の中を歩くことは幼児には何よりも楽しみのようである。毎週月曜にな

ると、上の子ども学校へ行く時玄関でうらやましそうな顔をする。どんぐりや栗を拾ったり、かたつむりや毛虫をみつける、どぶ川では葉っぱを流してみる。お母さん同志では悩みや喜びを共有している。何でもなく過ぎるような一日だけれど、絶対に親も子も豊かになって、ゆとりがうまれていることは確かだろう。この頃では、遠りがかりのおばさんが目を細めて見送ってくれる。小さな墓地では必ずみんな入りこんで、おまわりしている。ご先祖さまも時ならぬ可愛い足音に眠られないかもしれない。からすうりをみつけると人数分とるのに親は藪やぶの中に足をふみ入れなければならない。親が心を許しているので子供同志の関係も緊張がなく、柔軟である。勿論喧嘩もしょっ中だが、相手の親が納得づくなので、みていられる。少くともすぐ自分の子を止めに入る愚かなことはさけられるので有難い。

今後、集団保育の意義をもっと考え、さらに充実したものに深めていきたいと思っている。そして地域の子育て力をつけたいと切実に思うのである。